

聖書箇所・宣教題・・・歴代誌第一27章1-24節「支え合う祝福」

中心聖句・・・「ダビデは二十歳以下の者は数に入れなかった。主がイスラエルを天の星のように多くすると言われたからである。」(23節)

教会の働きの中には、いわゆる宗教的な働きに見えるものもあれば、それとは違っていわゆる一般的な働きに見えるものもあります。私たちが神様にふさわしい礼拝をおささげするためには、それら両方が、なくてはならない大切な働きであることを、聖書から教えられます。

I 神殿で礼拝をささげるための大切な役割

A 1節から15節では、「分団」ということばが多く出てきているように、ダビデ王の時代の軍隊が整えられていた様子が描かれています。軍隊と聞くと、神殿礼拝と関係がないように感じてしまうことがあります。けれども、当時の民を守るためになくてはならない大切な存在でした。

B 16節から22節では、神の民の部族の長が選任された様子が描かれています。彼らの役割は直接神殿で働くことのないものでしたが、それぞれの部族の政務をつかさどる大切な役割がありました。これも、神様を礼拝する民として歩む上で、なくてはならない存在でした。

C 25節から34節では、ダビデ王に仕えるつかさたちが選任された様子が描かれています。彼らの働きも神殿礼拝と直接関係がなかったかもしれませんが、彼らの働きがなければ神殿でふさわしいささげものを献げることはできませんでした。

II すべての祝福は神様のもの

A そのように、直接礼拝とは関係がない働きに見えるものが満たされているとき、私たちには注意しなくてはならないポイントがあります。それは、それらの祝福を自分たちのものだと的外れに考えてしまいやすいというポイントです。

B かつてダビデも、神様からいただいている祝福を自らのものだと考え、その力を誇示しようと国勢調査をしてしまったことがありました。そのままの状態では、ダビデは神様をふさわしく礼拝することはできませんでした。

C そこから悔い改めへと導かれたダビデは、いただいている祝福は神様のものであることを信じました。ですから、今回の神殿で礼拝をささげるための大切な役割を選任する際、23節にあるように、みことばに信頼して必要以上の人数を数え上げることを避けたのです。

III 支え合う祝福

A これから神殿を建設して礼拝をささげるための備えが進められ、その必要が満たされていることが確認されてきました。直接礼拝とは関係がないと感じてしまう役割でも、どれもなくてはならない大切な存在であり、神様はその必要を満たしてくださいました。

B すべての祝福が自分のものだと思っている時、私たちは礼拝を苦痛に感じたり、面倒くさく感じたりしてしまいます。それでは心からの礼拝をささげることはできません。けれども、神様のものだと思っている時、私たちは心からの喜びをもって礼拝をささげることができるようになります。

C そのすべての祝福を豊かに用いて神様を礼拝するために必要なことは、それらは自分たちの力によってではなく、神様の力によって与えられていることを認めて謙遜になることです。その心を持って、皆で支え合って礼拝することができるように祈りたいと願います。

結論・・・神の民に与えられた役割には、直接礼拝とは関係がないと感じてしまう役割もありますが、どれもなくてはならない大切な存在です。神様はその必要を満たしてくださいました。そのすべての祝福を豊かに用いて神様を礼拝するために必要なことは、それらは自分たちの力によってではなく、神様の力によって与えられていることを認めて謙遜になることです。その心を持って、皆で支え合って礼拝することができるように祈りたいと願います。